

# 11-12 世紀のチベット仏教に於ける二諦説の受容と思想的発展の解明

赤羽 律

オーストリア科学アカデミー アジア文化・思想史研究所 研究員

## 緒言

8 世紀後半に、インドからチベットへ仏教が国策として導入されたことにより、インド仏教の貴重な文献がチベット語へと翻訳され、保持された。このお陰で、我々は現在インドに於いて消滅してしまった仏教の容貌をある程度描くことが出来るのである。しかしその当時、インド仏教を理解し受容することに主眼が置かれ、チベット人自身が本格的に仏教思想を発展させるにはもう少し時間が必要であった。現在私達がチベット仏教として見聞きするチベット人自身による本格的な仏教思想形成が始まった時期こそ 11 世紀なのである。この時期に、チベット人達は様々なインドの論書・経典に基づき、彼ら自身の理解を積極的に論じ始めたのである。その中心に存在していたのがカダム派 (*dKa'gdam pa*) と呼ばれる当時のチベット仏教最大学派の人々であった。彼らが著作した文献の殆どは名前が知られるのみで、長い間我々の目に触れることがなかったが、2006 年を皮切りに、このカダム派の仏教僧の論書を纏めた『カダム全集』が出版されるに至り、数多くの貴重な文献を手にすることが出来ることとなったのである。

## 考察手法

本研究では、チベット仏教の多岐にわたるテーマの中でも、チベットに於いて実質的に主流となる中観思想の理論的拠り所である二諦説（二真理説）を採りあげた。特に 8 世紀初頭にインド仏教に於ける二諦説を確立したジュニャーナガルバ (*Jñānagarbha*) が二諦説について論じた『二諦分別論』 (*Satyadvayavibhāṅga*) の注釈書を採りあげることで、チベット人がインド仏教をどのように受容し、解釈し、発展させたのかを探ることを試みた。当該の『カダム全集』にはこの『二諦分別論』に対する注釈書が二編含まれている。一つはチベット仏教論理学に多大な影響を及ぼしたチャパ (*Phya pa Chos kyi seng ge*: 1109–1169) によるもの。もう一編はその

チャパの師として知られているギャマルワ (*rGya dmar ba Byang chub grags*: ca. 11–12c.) によるものである。この他、本研究者はチャパの二世代後に活躍したと思われるダルマタシー (*Dar ma bkra shis*: ca. 1200) と呼ばれる人物による注釈書を利用できる行幸に恵まれた。これら三つの注釈書は、11 世紀から始まるチベット仏教後伝播期の第三世代であるギャマルワから、第六世代のダルマタシーまでおよそ百年の間に書かれたものであることに加え、この三者が同一の学派系統に属していることから、この三編の同一論書に対する注釈書を比較、考察することにより、チベット仏教後伝播期に於いて、インド仏教の二諦説がどのように受け入れられ、チベット人独自の理解として取り入れられていったのかを明らかにしようと試みた。

## 結果及び考察

まずこれまでの研究成果として、ウィーン大学のタウシャー教授 (*Prof. Helmut Tauscher*) は、チャパが中観派系統の論書を著作する際に、二諦に関する四つの要素 (1「区別の基体 (*dbye gzhi*)」2「区別の意味 (*dbye ba'i don*)」3「数の確定 (*grangs nges pa*)」4「言葉の意味 (*ming gi don*)」) に基づいて論書の構成を行っていることを指摘し、これをチャパの革新として考察している。今回の研究により、チャパの師であるギャマルワも、この四種に基づく論書構成を自らの『二諦分別論注』で採用していることが判明した。一方、チャパの後で活躍したダルマタシーはこの四種に基づく論書構成を『二諦分別論注』において採用していない。これらのことから、論書の枠組みとしての四つの要素は、現在確認できる限りに於いては、ギャマルワによって採用され、チャパによって引き続き用いられたが、その後それほど定着することなく姿を消した可能性が高い。ただし、この四つの要素に関連する議論自体はそれ以後も姿や形を少しずつ変え発展しながら受け継がれていったことが後代の文献

より見て取れる。

特に注目したのは、上に述べた四要素のうち「区別の意味」と呼ばれる項目である。そこでは「勝義諦」という「究極的な真理」と「世俗諦」という「世間一般の真理」の二つがどのような関係にあるのかが論じられている。つまり、中観派が「真理が二つ」と言う時、何故真理が二つなのか、という批判が外部から与えられたと考えられる。インドに於いても同様の批判があったことはよく知られており、その解決がチベット仏教に託されたとも言える。何れにせよ、この二諦の関係に関して、三者とも『解深密経』と呼ばれる経典の記述を根拠にして論じていることが判明した。

まず、ギャマルワは、二諦の関係に関して以下の四つの可能性を指摘する。

1「壺と布の如く二諦は全く別の実体 (*dnegos po tha dad*)」2「二諦は特徴が同一である (*mtshan nyid gcig*)」3「二諦は同一の本性に於ける別な特徴である (*mtshan nyid tha dad*)」4「諦を二つと述べたのは、二諦の同一性を否定する為だけである」

この四つの可能性のうち、1と2に関しては、『解深密経』の記述に基づいて、それぞれ四つの過失が指摘されていると主張し否定する。一方で3に関しては、1と同様に「別」と表現されるものの、あくまでの特徴が別であるので、1とは違い『解深密経』に基づいて否定されるものではないとして一定の評価を下している。但し彼はその後別な観点からこれを否定し、4の立場こそ二つの真理の関係として正しいものであると主張する。

この分類方法自体は、彼の別の論書にも見出されるが、ここでは、この分類が中観派内部の学派分類の問題と絡めて論じられている。この点は今後の考察課題である。

次に、チャパであるが、彼は、ギャマルワの提示した四つの可能性のうち、3と4に関しては特に触れず、1と2のみ挙げ、ギャマルワと同じように『解深密経』に基づいてそれぞれ四つの過失が相応することのみを示す。表現に違いは見られるが、内容に関しては基本的に一致する。ただしチャパはギャマルワとは幾分異なり、次の様に2を表現する。2「二つの真理は異なった概念ではない (*ldog pa tha ma dad*)」。ギャマルワが特徴と呼んでいたものが、チャパによって概念 (*ldog pa*) と言い換えられている。この *ldog pa* という言葉はチベット仏教論理学に於いて重要なタームとして知られるが、その先駆者がチャパであることを考える時、この用語の変化は興味深い。また3の例が触れられないのは、ギャ

マルワによってこの3が考察され既に否定されていることから、チャパはこの点を論じなかったと思われる。

最後に、ダルマタシーはこのチャパの説明に基本的に従い、1と2のみ挙げその内容の分析は三編の中で最も簡潔で纏まったものである。ちなみに、彼は2を「二つの真理が同一の概念である場合 (*ldog pa gcig*)」と述べ、チャパが「別ではない概念」と間接的に述べたものを、積極的に「同一の概念」と表現している点に思想の整理が見出され、*ldog pa* の意味の変遷にも関わるかもしれない。同様の議論は、チベット仏教のその後の論師達も、昔の論師たちの見解として示すところであるが、そこまで含めた比較研究は今後の課題である。

## 要 約

二つの真理の関係というトピックに基づき、時代を追ってその変遷を眺めることで、チベット人たちがインド仏教から受けついで思想をどのように整理していったのか、その思索の跡を辿ることが可能になる。今回私が行った範囲は一つのトピックに過ぎないが、今後これを広く文献全体に対して広げていくことで、より広範囲な思想発展の経緯を明らかにできるものと考えている。

## 謝 辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術奨励金を賜りました。その支援により2012年に筑波大学で開催された日本西藏学会にて発表を行い、その内容は英語論文として本年度中に刊行予定となっております。また2013年7月にウランバートル(モンゴル)にて開催された国際チベット学会にて本研究発表の機会が得られたことをご報告し、改めて厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) Dar ma bkra shis: *bDen pa gnyis rnam par 'byed kyi bshad pa*. Mss., 26fols.
- 2) Phya pa Chos kyi seng ge: *dBu ma bden pa gnyis rnam par bshad pa yi ge rung dus gzhung gsal bar byed pa*. In *bKa' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po* Vol.6, 181–250, 33fols. 2006.
- 3) rGya dmar ba Byang chub grags: *bDen gnyis rnam bshad*. In *bKa' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po* Vol.19, 247–316, 35fols. 2006.
- 4) Helmut Tauscher: Remarks on Phya pa Chos kyi seng ge and his Madhyamaka Treatises, *The Earth Ox Papers: Proceedings of the "International Seminar on Tibetan and*

*Himalayan Studies” Held at the Library of Tibetan Works  
and Archives, pp.1-36, Dharamsala. 2010.*